

## レポート・論文の表記（日本語、横書きの場合）

小島朋之研究会 2003 年度

### 文章表記

現地の国名、地名、人名など

**日本、中国、台湾、香港のもの以外は原則としてカタカナ書き**

- ・ 漢字による表記が慣例になっている場合（たとえば金正日、金大中） 漢字で表記
- ・ 一般化していない固有名詞（地名、人名、機関名、会社名など）  
最初に限りその原語をカッコ内に付記する

数字の表記

原則として**算用数字**を使う

- ・ 年の表記は原則として西暦
- ・ 万以上の数字には万、億、兆などを用いる

数桁の数字は**途中で改行しない（次の行に改める）**

括弧ほか区切り記号

一般に小カッコ（ ）を用いる

小カッコのなかにさらに括弧を用いる場合は山カッコ

そのほかに、詳細・説明・要約などを示すコロン：や、ダッシュ を用いることもある

### 例

本土ミサイル防衛(National Missile Defense: NMD)の配備についてクリントン (Bill Clinton) 大統領は脅威、技術開発、コスト、軍縮および同盟諸国の立場などの全体的な戦略環境に基づいて決定することとしていた。しかし、2000 年 9 月にクリントン大統領はこの決定を次期政権に先送りした。NMDの配備に関する決定は、ブッシュ (George W. Bush) 政権になって本格的に進められている。

### 注の表記

**文中の該当箇所に通し番号をつけ、ページ脚注。**

注をつけるには、主に**2つの目的**がある。

本文で行った主張の補足

該当箇所の終わりに注をつけ、文中に書いたのでは文章が煩雑になったり、論証がわかり道にそれてしまうのだが、論証のために必要な情報を記す。例えば

- ・ 誤解を防ぐための論述
- ・ 当然あるはずの反対意見への考慮
- ・ 少し離れてはいるが傍証または補遺としてはたらく資料

引用した資料の典拠を明示

引用した部分の終わりに注をつけ、出典を示す。詳しくは事項を参照のこと。

注は、原則として各文章の末尾に付ける。その際、脚注番号は句点より内側に振ること。

一つの文に、複数の資料からの情報が盛り込まれる場合は、どの情報についてどの資料に依拠したのか、はっきりさせること。

補足の注に関しても、そのあとの（ ）内に依拠した資料を明示する。

例

NMD や TMD は抑止力としての核ミサイルの効用を大きく低下させる 1。中国のように小規模の核戦力で最小限抑止体制をとってきたケースはなおさらである 2。それによって中国の国際的威信の低下は避けがたい。

- 1 梅本哲也「本土ミサイル防衛の展開」森本敏編『ミサイル防衛 新しい安全保障の構図』（日本国際問題研究所、2002 年）、34 頁。
- 2 中国は、核の先制不使用、非核兵器国への恫喝を含む不使用を公言しているものの、自らの核戦略について明示したことはない。ただし、その戦力規模、構成から合理的に導き出せる戦略は、敵の大都市への報復戦力を保持することで核攻撃を抑止する最小限抑止戦略しかない（阿部純一「冷戦後を模索する中国の核戦略」『海外事情』1 月号 拓殖大学、1993 年 1 月 100 頁、及び中華人民共和国国務院新聞辦公室「2000 年中国国防」『人民日報』2000 年 10 月 16 日を参照）。

引用・参照の方法 出典（参考文献）の表記

日本語資料

- ・単行本 : 著者『書名』（出版社、出版年）、頁（あるいは X - Y 頁）。
- ・論文 : 執筆者「論文名」編者『論文掲載書名』（出版社、出版年・月）、頁。
- ・雑誌論文 : 執筆者「論文名」『雑誌名』巻号（出版社、出版年）、頁。
- ・新聞 : 執筆者「見出し」『新聞名』年月日。

同じ文献を繰り返し利用する場合

- ・すぐ前の注で挙げたものと同じ文献から引用する場合。  
**同書（同論文・同記事）頁。**
- ・既に注で挙げた文献を再度利用する場合。  
**筆者（執筆者）、前掲書（前掲論文・前掲記事）、頁。**  
ただし、同じ筆者が書いたものを複数引用する場合は  
**筆者、前掲書、（出版年）、頁。**  
さらに同じ出版年のものは出版年のうしろに a, b, などの記号を付し、参考文献目録に記号と共に記す。

例 1 単行本、 2 論文、 3 既に挙げた資料の引用（日本語）

中国は、建国以来 50 年にわたって一党体制が続いてきた。一党体制の継続とともに、それへの問いかけは、党の内外から繰り返されてきた 1。1980 年代に入って、幾度かの学生デモは民主・自由化を求めてきた。しかしながら、そのいずれものが、否定されてしまったのである。民主化運動の特質を、天児慧は次のように指摘している。すなわち「中国における民主化運動の主体的基盤や政治的環境の厳しさを意味するものである」2。しかし、小島朋之が指摘するように、「学生デモが主張した民主・自由化を含めて改革潮流はすでに体制内にビルト・インされていた」のである 3。

- 1 小島朋之「中国共産党：一党体制の存続と変容」野村浩一編『岩波講座 現代中国 第 1 巻 現代中国の政治世界』（岩波書店、1989 年）、111 - 112 頁。
- 2 天児慧『歴史としての鄧小平時代』（東方書店、1992 年）、146 頁。
- 3 小島、前掲論文、113 頁。

外国語資料 (英語)

- ・単行本 : 著者, **書名(イタリック)**, (出版地: 出版社, 出版年), p./pp. (頁).
- ・論文 : 執筆者, “論文名” **in 書名(イタリック)**, 編者 **ed.**, (出版地: 出版社, 出版年), p/pp.
- ・雑誌論文: 執筆者, “論文名,” **雑誌名(イタリック)**, 巻, 号, 出版年, p./pp.
- ・新聞 : “見出し記事名,” **新聞名(イタリック)**, 出版地, 日月, 年.

著者名は原則として姓名を倒置する: Dulles, John F., *War or Peace*,.....

- ・共著の場合 2 人目からは倒置しない:

Dulles, John F., Dean Acheson, and George F. Kennan, *War or Peace*,.....

- ・3 人以上の共著の場合: Dulles, John F., et al. *War or Peace*,.....
- ・編著の場合: Dulles, John F., **ed.** *War or Peace*,.....

複数の編者の場合: Dulles, John F. and Dean Acheson, **eds.** *War or Peace*,.....

邦訳がある場合はカッコ内に記述:

Dulles, John F., *War or Peace*, (New York, Macmillan, 1950) (大場正史訳『戦争か平和か ダレス回顧録』鳳映社、1958 年)

出版地が外国の場合の出版社 - 都市名, (もしくは: ) 出版社: 上記の例を参照のこと  
- その場合国名まで書く必要はない

同じ文献を繰り返し利用する場合

- ・すぐ前の注で挙げたものと同じ文献から引用する場合。

**Ibid.**, p./pp.

- ・既に注で挙げた文献を再度利用する場合。

筆者 (執筆者), **Ibid.** (または **op. cit.**、または**書名の略式**), p./pp.

同じ筆者による複数の資料を引用する場合は日本語と同様。

**Ibid.** = *Ibidem* (“In the Same Place”) の略式、「同書 (同章/節/ページ) に」

**op. cit.** = *opere citato* の略式、「前掲 (引用) 書中に」

例 1 単行本、2 すぐ前に挙げた資料の引用、3 論文・雑誌論文 (英語)

中国が今後の東アジアの平和と安定にとって、きわめて重大なアクターであることに異論はないであろう。異論があるのは、このアクターの影響力の方向である 1。中国は不安定要因なのか、安定要因なのか論者にとって見解は分かれている。前者は、政治体制の相違、民主・人権をめぐる価値観の相違、軍事力の近代化、そして歴史的要因等を取り上げ、対立を不可避なものとして論じる傾向がある 2。しかしながら、重要なのは、中国がいずれの側面も持ち合わせているということであり、緻密な現状分析をふまえて、将来シナリオを描いておくことである 3。

1 Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and The Rethinking of World Order* (London and New York: Touchstone Books, 1997) p. 253.

2 *Ibid.*, p.250 .

3 こうした観点にたったものに次のような研究がある。Robert S. Ross, "The Geography of Peace: East Asia in the Twenty-first Century", *International Security*, Vol. 23, No. 4, Spring 1999, pp. 81-118; Peter Van Ness, "China and the Third World: Patterns of Engagement and Indifference," in Samuel S. Kim ed., *China and the World: Chinese Foreign Policy Faces the New Millennium* (Boulder: Westview Press, 1998) pp. 151-168.

未刊行資料・インターネット上の資料 (日本語・英語)

・未刊行資料、マイクロフィルム

- ・ 必ず所蔵場所を示す
- ・ 次のような情報があれば書く：表題、地名、日付、整理番号
- ・ インタビュー：誰が誰に対して行ったのか、記録形態、所蔵場所

例 1 マイクロフィルム、2 一次資料

1 「台湾記事」1 『樺山資紀文書』266、国会図書館資料室所蔵。

2 OMGUS(Office of Military Government for Germany, United States), Chief of Staff, *Memorandum to All Divisions and Offices, Subj.: Revision of Existing Directives for Military Government in Germany*, WW RC (World War Records Center Alexandria, Virginia), 367-2/5.

・インターネット上の資料

「表題」(ホームページ名、URL、アクセスした日付)

例 インターネット上の資料

双方は、目下の情勢において、両国間の協力の重要性は一層増していること、及び両国間の友好協力を更に強固にし発展させることは、両国国民の根本的な利益に合致するのみならず、アジア太平洋地域ひいては世界の平和と発展にとって積極的に貢献するものであることにつき認識の一致をみた。双方は、日中関係が両国のいずれにとっても最も重要な二国間関係の一つであることを確認するとともに、平和と発展のための両国の役割と責任を深く認識し、21世紀に向け、平和と発展のための友好協力パートナーシップの確立を宣言した。

1 「平和と発展のための友好協力パートナーシップの構築に関する日中共同宣言」(外務省ホームページ、[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kaidan/yojin/arc\\_98/c\\_kyodo.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kaidan/yojin/arc_98/c_kyodo.html)、2002年5月7日)

ネット上の学術論文やデータベース、PDF ファイル

作成者の名前や作成日時も明記する

例: Scots Teaching and Research Network, Ed. John Corbett, Feb. 2, 1998, (University of Glasgow, <http://www.arts.gla.ac.uk/www/english/comet/stern/htm>, Mar. 5, 1998)

「東アジア地域研究」小島朋之、2000年4月作成、(慶応大学湘南藤沢キャンパス東アジア地域研究プロジェクト、<http://www.keio.sfc.ac.jp/kojima/china>、2003年1月)

図や表の引用

図や表の下に出典を付ける。掲載する情報は脚注と同様。

例:(引用した図や表の下に)

出典 小島朋之『現代中国の政治』(慶應義塾大学出版会、1999年) 322頁

**Note:** From Etzold, Thomas H., and John Lewis Gaddis, *Containment: Documents on American Policy and Strategy, 1945-1950*, (New York, Columbia University Press, 1978) p. 14.

#### 図や表を自分で作成した場合

筆者が作成したことを明記する。また、データなど、参考にした資料も明記。

例：表は筆者作成、推移した人数の値については、小島朋之（2000 年）192 頁参照。

#### 間接的な引用：参考資料の中の引用部分を引用したいとき

- ・可能なかぎりもとの文献にあたる。その文献から直接引用。
- ・無理な場合、「参照資料」なお、この部分は筆者の次の文献からの引用である「引用資料：参照資料の注などを参照のこと」などと表記する。

#### 参考文献表

注とは別に、論文やレポートの末尾には、直接引用した資料、および参考にした資料をリストとして挙げるのが求められる。各資料の表記方法は に示したとおり（ページは表記しない）。参考文献表作成方法（参考資料の並べ方）には様々な方法がある。一般的なものを下に記しておく。使用した資料の量や、割合などによってこれらの方法を組み合わせる。

- ・筆者の姓 50 音順（アイウエオ順）同じ筆者の場合出版年の古いものから
- ・筆者の姓のアルファベット順、同じ筆者の場合出版年の古いものから 英語文献
- ・日本語、英語、中国語など言語別に分ける
- ・一次資料、単行本、論文、新聞など、資料の種類別に分ける  
資料の内容（地域・分野など）に基づく分類は、必要ない

#### 参考資料

木下是雄『レポートの組み立て方』（筑摩書房、1994 年）

国際関係学科「論文執筆要項」（国際基督教大学、1998 年 12 月 19 日改訂）

小林康夫・船曳建夫編『知の技法 東京大学教養学部「基礎演習」テキスト』（東京大学出版会、1994 年）

増田雅之「レポート・論文の書き方」（小島研究会、2000 年 6 月 20 日）

Fowler, H. Ramsey, Jane E. Aaron, *The Little, Brown Handbook*, 7<sup>th</sup> ed. (Longman, 1997)

英語資料、インターネット資料の文献リスト表記については、この文献の 608～628 ページに MLA (Modern Language Association) モデルのインデックスが付いており、詳しい。

本要項は、小島朋之教授のご指導のもと、研究会 4 年（現修士 1 年）福田円が作成しました。なお、例文の中には、既存の論文から引用、便宜上一部改定したものもありますが、出典は割愛させていただきます。